

# グラタン・コレクションについて

On the Grattan Collection

浜 林 正 夫  
Hamabayashi Masao

## I.

ヘンリ・グラタン (Henry Grattan, 1746-1820) は「グラタン議会」(1782-1800) の中心人物として有名である。この議会は1494年のポインティングズ法によって立法権を制約され、さらに1720年の宣言法によって事実上立法権を剥奪されたアイルランド議会の立法権の独立を回復し、「アイルランド自治の原型」をつくったといわれるもので、このような自治回復にはアメリカ独立戦争によってイギリス本国が苦境に追いこまれていたという事情が有利に作用したとはいえ、ヘンリ・グラタンとヘンリ・フラッド (Henry Flood, 1732-1791) という「2人のヘンリ」の活躍に負うところが大きかった。とくにグラタンの「ロマンチックな雄弁」は大きな影響をもったという。

このコレクションはそのグラタンの蔵書の1部であって、321点のパンフレット(51冊に合本)とグラタンの演説集四巻からなっている。収集の事情は不明であるが、体系的な意図をもって収集につとめたというよりは、アイルランド問題およびカトリック解放の問題を中心として時事評論的なものをあつめているうちにまとまったコレクションらしい。しかしこの当時のアイルランド問題を知るうえでは第一級の史料をふくんでおり、もっと狭くグラタン研究のうえでも彼の関心の所在を知るために不可欠の素材であろう。

コレクションの内容について一応の見当をつけるために、簡単にグラタンその人について見ておこう。彼はダブリンの生まれで、父はダブリン市の地区裁判所判事やアイルランド議会の議員をつとめた上流の家庭で、ヘンリもダブリンのトリニティ・カレッジを卒業したあと、ロンドンのミドル・テンプルへすすみ、1772年にアイルランドの弁護士となり、75年にはアイルランド議会の議員となった。このコレクションにおさめられているパンフレットのうち、発行年次のもっとも古いものは1747年であるが、大部分は70年代後半以降であるから、彼が議員活動をはじめからのちのものである。

議会におけるグラタンの立場は、父とは逆に、進歩派のそれであった。この進歩性がどの程度のものであったかは、グラタン研究のひとつのテーマとなりうるが、イングランドの急進主義者とも交友はあったらしく、たとえば当時のイングランドの代表的な急進主義者のひとりジョン・カートライト (John Cartwright, 1740-1824) の著書の1冊には“Presented to Henry Grattan, Esq, as a token of respect by the Author” という書きこみがある。

アイルランド・プロテスタント進歩派の当面の目標は、イングランドの重商主義政策の撤廃とアイルランドにとっての自由貿易の実現であったが、やがてそれは立法権の独立という主張へ発展していった。グラタンがこの提案をはじめておこなったのは1780年4月のことであったが、このときは決定にいたらず、82年になってようやく実現した。この自治議会のもとで自由貿易をみとめられたアイルランドは経済的にも活況を呈し、カトリックへの規制もいくぶん緩和されたが、自治はわずか18年しかつづかなかつた。1800年にイングランドがアイルランド合併法制定を強行し、アイルランド議会そのものを廃止してしまったからである。グラタンはもちろんこの合併に

反対したが、アイルランド議会においても合併賛成派が多数を占め、採決の結果、グラタンは敗北した。

自治から合併へというこの転換はなぜおこったのか。この問題についてふつう与えられている説明は、1791年にウルフ・トーン (Wolfe Tone, 1763-1798) によって設立された「ユナイテッド・アイリッシュメン」という急進主義的な団体が議会改革を要求してやがて実力行使に走り、さらに当時イギリスの戦争相手国であったフランスの軍事援助までもとめるにいたったので、アイルランド内部においてさえ世論の支持を失い、これに乗じてイングランド側が合併を強行したというものである。この説明は大筋において正しいが、しかしこのほかに議会内における「2人のヘンリ」の対立と足並みの乱れも指摘される必要があるだろう。フラッドにくらべるとグラタンの方が保守的で、グラタンは1782年の立法権の独立に満足していて、フラッドのようにそれ以上のイングランドの権利放棄までは要求せず、また議会改革においてもグラタンは選挙権を自由農民に与えるにとどめようとしていた。

グラタンは「ユナイテッド・アイリッシュメン」のメンバーではないかという疑いをかけられたこともあったが、このような議会改革論はチャーティストの6項目要求をほとんど先取りしていた「ユナイテッド・アイリッシュメン」とはかなりへだたっており、また彼はイギリスの対フランス戦争を支持していたのだから、フランスに援軍をもとめたトーンらとの差は歴然としている。

合併後、グラタンは一時引退していたが、1806年になって連合王国の議会の庶民院議員となった。その後の彼の活動はもっぱらカトリック解放にささげられたが、カトリック解放法の成立 (1829年) をまたずに世を去った。

## II

以上のようなグラタンの生涯と活動を念頭においてこのコレクションをみると、大別して、アイルランドの自治獲得、急進主義とのかかわり、カトリック解放という3つの問題群にまとめることができるであろう。

第1のアイルランドの自治獲得という問題についていえば、彼自身の議会演説集4巻が基本史料である。これは連合王国議会 (タイトルでは「帝国議会」となっている) における演説をふくんでいるから、カトリック解放問題にも関係しているが——。そのほか、アイルランドの自由貿易の主張、あるいはこれに反対していたエドマンド・バークの著作などもあるが、とくに注目されるのは「ユナイテッド・アイリッシュメン」の議事録および委員会報告、トーンの著書であって、これによってこの団体の活動の一部を知ることができる。またアイルランド庶民院の議事録や討議記録も部分的なものではあるがふくまれており、1703年と1719年のアイルランド貴族院の記録もある。もう1人のヘンリであるフラッドのものは1787年の演説がひとつあるだけで、これはやや物足りない。

第2の急進主義とのかかわりで注目をひくのは、イングランドの急進主義団体の中心的存在であった憲政情報協会にかんする史料である。これはアイルランド史というよりもむしろイングランド史にかかわるものであるが、この協会の議事録や呼びかけの類が10点あり (ただしそのうちの1点はいっしょに合本されてはいるが「人民の友協会」という別の組織のもの)、さらにそのほかに、たとえばトマス・デー (Thomas Day, 1748-1789) の演説のように、この協会が啓蒙宣伝活動の一環として無料配布したパンフレット類が数点ある。この協会は有名なわりにその活動内容があまり知られていないので、これらの史料はそれを知る有力な手がかりとなるであろう。この

協会とならぶもうひとつの中心的組織であったロンドン通信協会関係の史料がまったくないのは、ネガティブな意味で興味ふかい。急進主義者のものとしては前述のカートライトやトマス・ペイン (Thomas Paine,1737-1809)、トゥーク (John Horne Tooke,1736-1812) ほか若干のものがあるが、プライス (Richard Price,1723-1791)、プリーストリ (Joseph Priestley,1733-1804)、セルウォール (John Thelwall,1764-1834)、ハーディ (Thomas Hardy,1752-1832) などはない。

第三のカトリック解放にかんするものは点数としてはたぶんいちばん多いであろう。そのなかで注目されるのは「アイルランド・ローマ・カトリック委員会」からの訴え (1805年)、カトリックから連合王国議会への請願 (1805年)、グラタン提案についてのアイルランド庶民院の討議 (1795年) などであろう。なおこれとの関連で、十分の一税問題をとりあげたいいくつかの著作にも注目しておきたい。グラタンの死後10年ほどたつと、「十分の一税戦争」とよばれる農民の大反乱がおこるのである。

なお、アイルランド自治にも関係するが、トマス・プライア (Thomas Prior,1682?-1751) による「アイルランド不在地主のリスト」は当時のアイルランド土地問題をさぐるうえでの貴重な史料である。この書物の初版は1729年であるが、コレクション中のものは第6版 (1783年) で、プライアの死 (1751年) 後も補正がおこなわれ、この版では1782年現在のリストとなっており、アイルランドの富がいかに多くイングランドへもちだされているかがしめされている。これもまた農民蜂起の背景をなしているといえよう。

(一橋大学経済学部教授)